帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集（1997）

考古学から見た中世寺社

―中世寺院遺跡の分類と変遷を中心に―

笹生　衛

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．中世寺院の類型化
Ⅲ．中心仏堂建物の規模・構造
Ⅳ．中世寺院の変遷と背景
Ⅴ．まとめ

Ⅰ．はじめに

中世宗教史は、文献史学の面では、黒田俊男氏による顕密体制論の提示[1]以来、それまでの浄土宗や禅宗など鎌倉新仏教を中心とした研究とは対照的に顕密仏教を中心とした旧仏教側からの研究・分析が多くみられるようになっている。最近では平雅之氏・佐藤弘夫氏の顕密体制の構造論的な分析[2]、細川涼一氏の律宗寺院の分析[3]、海津一郎氏の神領興業法の研究[4]、山田邦明氏の鎌倉寺院領の分析[5]など、その内容は多岐にわたっている。このような中世宗教史の最も重要な舞台は言うまでもなく中世寺社であり、その組織構造や所領支配システムなどは、前述したような文献史学的な研究から多くの部分で解明が進んでいる。

これに対し、中世寺社の具体的な景観や構造の分析が可能な考古学的な分野では、今だに中世寺社の組織的・総合的な研究・分析に着手していないのが実状である。たしかに、上原真人氏をはじめとする中世瓦の研究[6]や山岸常人氏の中世仏堂研究[7]、さらに鎌倉を中心とした極楽寺や永福寺といった大規模寺院の発掘調査[8]など、最近はその内容を充実させつつあるものの、古代寺院研究に見られるような寺院伽藍の空間配置や信仰内容の類型化に関する研究は未着手の状態であると言っても過言ではないだろう。これは、中世寺社の多くが現在も寺院や神社として機能しており、古代寺院のような広範囲の発掘調査が困難である場合が多く、限られた範囲の発掘調査による断片的な資料しか得られないことに起因しているとも言える。

そこで、ここでは、主要な中世寺社、特に最近の寺院の調査例を中心に取り上げ、中世寺院の類型化を行い、その年代的な変遷と背景についても考察し、今後の研究の叩き台として提示することとしたい。

II．中世寺院の類型化

寺院の類型化には、本来、寺院建物やその遺構の規模・配置を中心的な基準とすべきであるが、中世寺院遺跡に関してはこれらのデータが均質に得られる例は少なく、ここでは、遺跡の立地状況、出土遺物から推定できる遺跡の存続年代などを基準に類型化を試みたい。

A類型・古代寺院系中世寺院

古代以来の系譜を持つ寺院が、12世紀から13世紀にかけて古代寺院を復興する形で成立する中世寺院であり、その性格・系譜により①中世国分寺、②国分寺以外の地方寺院系中世寺院、③聖域立地型中世寺院、④権門寺院系中世寺院の4類型に細分が可能である。

A－1類（中世国分寺）

古代の国分寺が12世紀から13世紀にかけて復興し中世寺院として機能する例であるが、現段階では、その伽藍配置や規模などの具体的な状況は不明な部分が多く残されている。

千葉県市原市・上総国分寺の例を見ると、尼寺では11世紀代に堂舎が完全に廃絶すると同時に、八稜鏡と黒色土器、念珠などの副葬品を伴う土坑墓が営まれ、僧寺に隣接する荒久遺跡では、菊花双鳥鏡や水晶製念珠などの副葬品を伴う12世紀後半代の土坑墓が営まれており、11世紀から12世紀にかけて国分寺やその周辺地域は墓域化する傾向が認められる。[9)]

東京都国分寺市・武蔵国分寺では、尼寺に隣接する埋没谷部分の発掘調査により墓として使用された地下式土坑が多数確認されている。その成立年代については特定することができないが、ここにおいても中世国分寺と墓域との関連性を確認することができる。[10)]

千葉県市川市・下総国分寺では、火葬墓と光明真言を墨書した土師質土器小皿が確認できる。火葬墓は僧寺の講堂跡に、12世紀代の白磁水注を骨蔵器として営まれたものである。光明真言を墨書した土師質土器小皿は、口径9㎝前後、体部下半は内湾して立ち上がり、口縁部付近は外反するもので、口唇部は内面が面取りされ丁寧に処理されている。これらの形態・技法的な特徴から年代的には13世紀代以前である可能性が高く、光明真言は、内面の見込み部分に時計回りの螺旋状に墨書されている。この墨書土器は遺構に伴っていないために断定はできないが、光明真言と葬送儀礼との強い関連性は指摘されるところであり、葬送に伴い使用された可能性が高い。これらの遺構・遺物から考えて、下総国分寺においても12世紀代から13世紀代にかけて墓域としての性格が成立していたと推定することが可能である。[11)]

このように、中世国分寺には墓域としての側面を認めることができ、それは上総・下総国分寺の例から11～12世紀代にまで遡ることが可能である。そして、これは、古代国分寺が衰退した後もその寺域は聖域視され、寺僧や国衙在庁官人層の葬送地へと転化した結果ではなかろうか。また、国分寺の中世における復興は、文献資料の上では律宗僧侶によって積極的に進められたことが指摘されているが[12]、それも国分寺の墓域の管理・運営をきっかけに律宗僧侶の国分寺への介入が行われたとも考えることができよう。

Ａ－２類（国分寺以外の地方寺院系中世寺院）

国分寺以外の定額寺クラスの初期寺院や８後半～９世紀代の山林寺院などが、12世紀から13世紀代にかけて中世寺院として復興するタイプであり、埼玉県比企郡都幾川村・慈光寺遺跡群、宮城県松島町・円福寺遺跡、岩手県北上町・横町遺跡、千葉県夷隅郡岬町・岩熊廃寺（法興寺跡）、千葉県印旛郡栄町・龍角寺、千葉県千葉市・千葉寺などが含まれる。

慈光寺は、９世紀代、天台別院一乗院の称号を受けた古代山林寺院であり、中世には丘陵斜面に多数の平場を設けて釈迦堂や僧坊が築かれていたようである。確認調査により、13世紀前半までに巴紋と剣頭紋の軒瓦を伴う基壇建物（釈迦堂）が建立（復興）されていることが判明しており14・15世紀代を中心に僧坊の整備も行われている[13]。

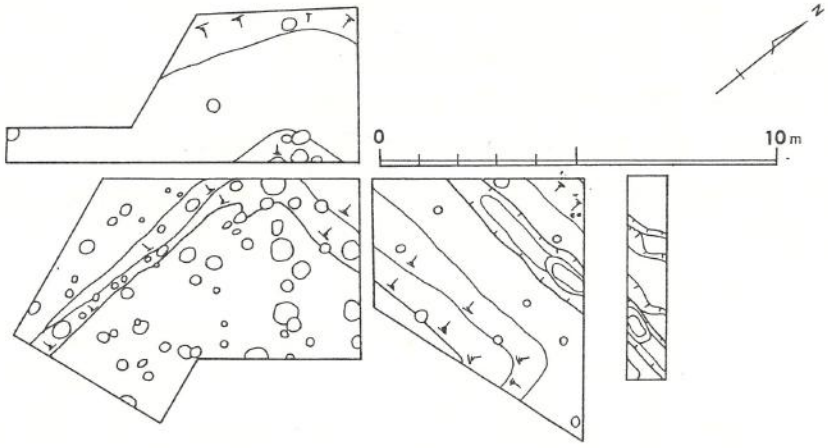
円福寺は９世紀代に慈覚大師・円仁により創建されたとの所伝を持つ寺院である。13世紀後半に得宗家の祈願所として整備され天台系寺院から禅宗寺院となり、15世紀代に廃絶している。発掘調査により基壇建物、切石積基壇の回廊、井戸、園池跡などが確認されている[14]。

法興寺と龍角寺は、山田寺系の軒丸瓦を使用し、龍角寺は７世紀後半、法興寺は８世紀初頭の創建と推定される。また、千葉寺は複弁八葉の特殊な軒丸瓦を使用し、８世紀前半代の創建と考えられる。いずれの寺院も郡寺もしくはそれに準ずる初期寺院である[15]。

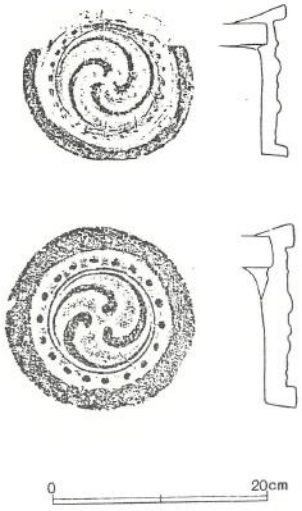
法興寺は、中世には園池を伴う寺院として復興されていることが確認調査の結果から推定でき、隣接する裏山部分から火葬墓の骨蔵器に使用された12世紀後半代の渥美窯の小型壷が出土していることから、13世紀代までには墓域を伴う寺院として復興していた可能性が考えられる[16]。

千葉寺では12世紀代に境内に経塚が作られ、龍角寺では鎌倉時代の埋経が知られており[17]、中世初期の段階でともに経塚が営まれる聖域的な性格を帯びるようになっている。さらに、龍角寺と千葉寺は、13世紀後半～14世紀前半に称名寺系の律宗僧侶との関連が確認でき[18]、これらの南関東の古代寺院も東北地方の立石寺などと同様、13世紀後半以降、律宗僧侶により復興され、彼らの活動の場となっていたと考えられる。

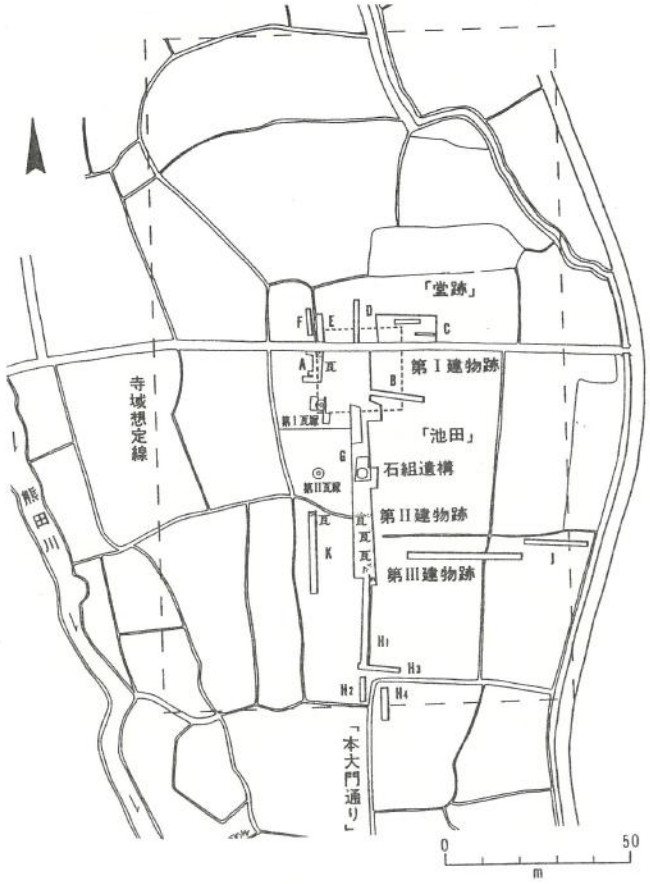
また、横町遺跡では、仏堂と思われる12世紀代の基壇建物が確認されており、先行する古代の仏堂の存在が推定できることから[19]、この類型に含めて考えることができる。



慈光寺跡検出基壇建物跡



慈光寺跡出土軒丸瓦



法興寺跡遺構全体図

A－3類（聖地立地型中世寺院）

山岳信仰や水源信仰、さらに延喜式内社など古代以来の聖地に関連した寺院が、12世紀以降に復興・整備されるタイプの中世寺院である。A－2類の古代山林寺院系の中世寺院と類似するが、ここでは信仰対象が明確な例をA－3類とする。山岳信仰に由来する修験信仰関連の中世寺院の多くがこの類型に含まれると思われる。

具体的な例には、福井県勝山市・平泉寺坊跡、石川県小松市・浄水寺、茨城県つくば市・東城寺、同・筑波山寺、徳島県上板町・神宮寺遺跡などが挙げられる。

平泉寺は、8世紀代に泰澄により開山された白山信仰の中心寺院であり、文献では12世紀後半代に延暦寺の末寺になっている。僧坊跡で確認調査が実施されており、礎石建物や石敷道路など、16世紀代までの坊院跡の大規模な遺構が確認されている[20]。

浄水寺は水源信仰に伴う寺院で、10世紀段階の墨書に残された寺名も水信仰に由来するものである。その起源は8世紀代まで遡る可能性があり、10世紀に寺院としての成立が確認できる。12世紀代には中心仏堂として礎石建物が建設され、中世寺院として整備がおこなわれ、14世紀後半に規模を縮小した仏堂の再建が行われた後、15世紀後半には寺院自体が廃絶している[21]。

東城寺と筑波山寺は、ともに筑波山信仰に関連する古代寺院である。東城寺では、8世紀後半代の年代が推定できる単弁八葉蓮弁紋の軒丸瓦と、常陸国分寺と同笵の唐草紋の軒平瓦が境内で採集されており、8世紀後半から9世紀代には寺院が建立されていたと考えられる。また、境内では天治元年（1112）銘を持つ経筒が出土した経塚が存在し、その銘文からこの経塚は有力在庁官人であり開発領主でもある平致幹を壇越として、延暦寺僧・径暹の教導で造営されたことが判明している。また、寺には嘉禎3年（1237）の造立銘のある広智像が安置されていることから、13世紀前半までには中世寺院として復興・整備されていたと考えられ、経塚の造営された12世紀代には復興が開始されていた可能性も高いだろう。一方、筑波山寺では発掘調査は実施されていないが、9世紀代前後と13世紀後半代の瓦が採集されており、古代寺院の存在と中世における復興が行われた可能性が考えられる。また、13世紀後半の瓦は律宗僧・忍性によって創建された三村山清涼院の瓦と同笵のものであることも確認できる[22]。

神宮寺遺跡は、延喜式内社・鹿比売神社の神宮寺である可能性が高い遺跡である。発掘調査の結果、礎石仏堂建物、石塔墓群、土器焼成遺構などを検出している。中心の仏堂建物は13世紀中頃に成立、石塔墓群も13世紀代にはその形成が開始されており、15世紀代には寺院が衰退・消滅に向かっている[23]。

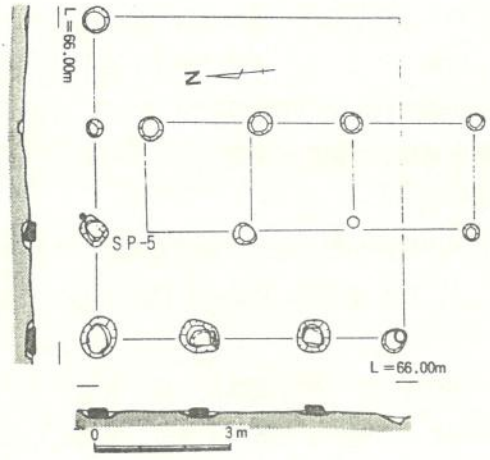
A－4類（権門寺院系中世寺院）

中央権門寺院の別院・別所など、権門寺院に直結するタイプの寺院である。東大寺の別

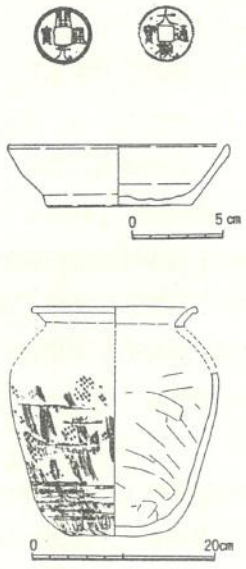
中心仏堂
凡　例
各平坦面及び主要遺構
墨書土器出土地点
1　大　溝
2　3号溝
3　Ⅲ—1平坦面
4　Ⅲ—2平坦面
5　湧水地点
6　浄水寺の池
0
20m
1／600

浄水寺跡遺構全体図

神宮寺遺跡遺構全体図



神宮寺遺跡中心仏堂跡



神宮寺遺跡中心仏堂地鎮具

院であった京都府山城町・光明山寺、大阪府阪南町・金剛寺などがこれに含まれる。

光明山寺の創建は10世紀に遡るが、発掘調査により門跡や築地塀跡などを検出すると同時に「建長元年東大寺三面僧坊」と記された軒丸瓦が出土しており、12世紀末期から13世紀にかけて行われた東大寺の修造・復興に連動して別所寺院・光明山寺でも修造・復興の動きがあったと推定できる。[24]

また、播磨系の瓦が多く供給され権門寺院との関係が想定できる金剛寺遺跡もこの類型に含めることが可能である。金剛寺遺跡では平安後期に創建された仏堂の基壇が検出されており、この仏堂は室町時代後期に大規模な修復を受け、江戸時代に洪水の影響を受け廃絶している。創建時期の遺物には三鈷杵を墨書した土器があり、密教信仰の影響を考えることが可能である。[25]

B類型・氏寺系寺院

特定の氏族が氏寺、もしくは壇越として建立した寺院・堂で、建立氏族の性格、建立年代、寺院遺構の状況により、①開発領主系氏寺、②得宗・御家人系氏寺、③居館・城郭付属氏寺・堂に細分することが可能である。

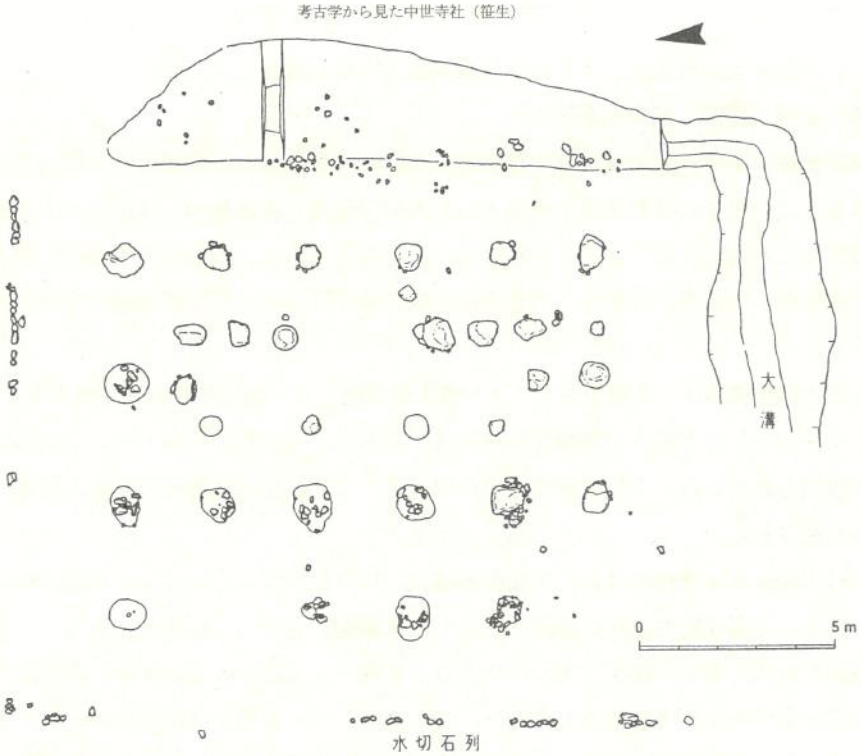
B－1類（開発領主系氏寺）

12世紀後半代に、開発領主や上層の国衙在庁などを壇越として建立される寺院で、中央官衙・六勝寺系や石清水八幡宮・六波羅蜜寺系の軒瓦を使用したり、浄土庭園を備える例が多く見られる。茨城県つくば市・日向廃寺、岩手県平泉町・奥州藤原氏関連寺院群、栃木県足利市・法界寺跡、神奈川県鎌倉市・永福寺跡などが含まれる。

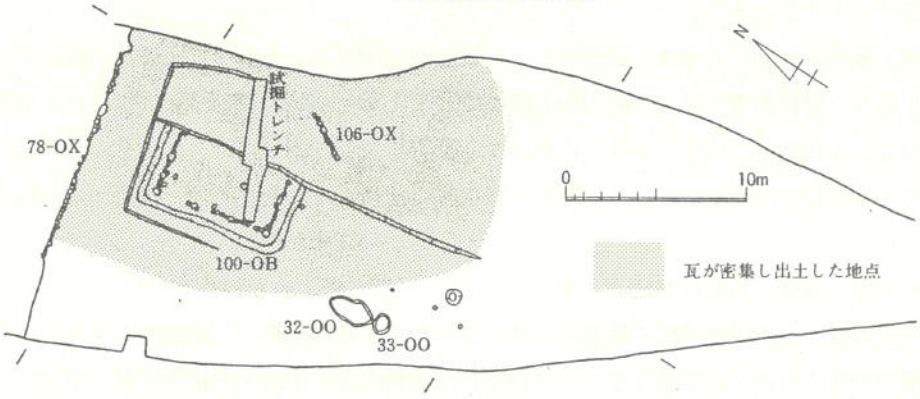
日向廃寺は多気氏の居城とされる城山の南麓に立地することから、多気氏（常陸平氏）を壇越とする寺院と考えられ、出土した巴紋軒丸瓦や剣頭紋軒平瓦などから12世紀後半に建立されたと考えられる。阿弥陀堂と考えられる四間四面の礎石立ちの仏堂に翼廊が取り付いており、園池遺構が存在した可能性も指摘されている。仏堂は規模を縮小した形で再建されるが最終的には廃絶する。この寺院の壇越であった可能性の高い多気氏（常陸平氏）は、前述の東城寺経塚の経筒銘文から延暦寺僧侶との関係が確認でき、日向廃寺の建立も延暦寺僧侶との関連を想定することが可能であろう。[26]

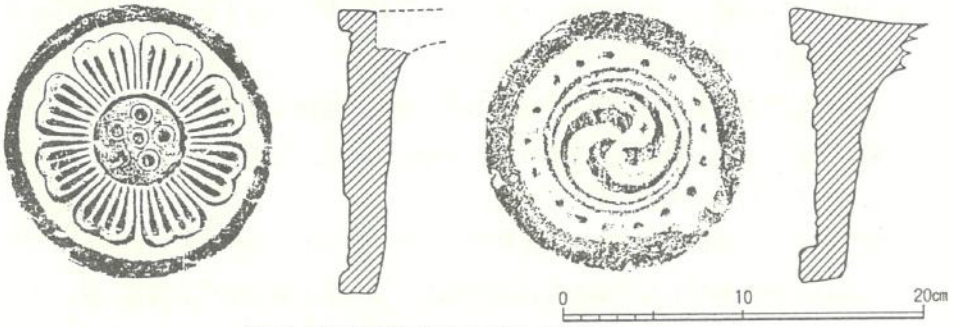
法界寺は、開発領主・足利氏の氏寺としての性格が考えられる寺院であり、発掘調査により三間四面堂跡、園池跡が確認されている。12世紀末期に創建され15世紀代には廃絶する。[27]

平泉・奥州藤原氏関連寺院群（毛越寺・観自在王院・無量光院など）と永福寺は、12世紀後半代に奥州藤原氏と鎌倉将軍家が壇越となって建立した寺院である。永福寺では阿弥陀堂・薬師堂・釈迦堂のなどの諸堂に翼廊が付き、毛越寺でも主要堂舎に翼廊が付き、ともに浄土庭園を伴う大規模なものである。この内、永福寺については15世紀代に堂舎は廃



横町遺跡中心仏堂跡





金剛寺遺跡遺構全体図及び出土軒丸瓦

絶し、火葬土坑が営まれるようになり墓域的な性格が残存している。[28]

B－2類（得宗・御家人系氏寺）

13世紀後半以降、北条得宗家や幕府御家人層の氏寺や彼らを壇越として建立された寺院である。この類型には群馬県前橋市・白石大御堂遺跡、茨城県つくば市三村山・極楽寺清涼院跡などが含まれる。また、得宗家との関係を考えると、13世紀後半段階に一斉に成立した極楽寺、称名寺、建長寺、円覚寺など鎌倉諸寺院の多くがこの類型に含まれると考えられる。

白石大御堂遺跡は、在地領主クラスの武士を壇越として建立された寺院跡と考えられる。方形に区画された寺域内では掘立柱建物跡、園池跡、石組墓、火葬土坑、土坑墓などの遺構が検出されている。寺院の創建は13世紀後半代で15世紀には廃絶するが、墓域としての性格が残される。[29]

三村山極楽寺・清涼院は、小田氏を壇越に、13世紀中頃に忍性により整備された律宗寺院である。先行寺院の存在が確認されるためA類型に含まれる可能性もあるが、その寺院が確実に古代に遡るか確認できないためB－2類として扱うこととする。確認調査により13世紀後半代の瓦が多数出土しており、この瓦は、A－3類型の筑波山寺やB－1・2類型と思われる足利市知光寺跡、益子市地蔵院、小栗寺山遺跡など周辺の中世寺院への供給も確認することができる。[30]

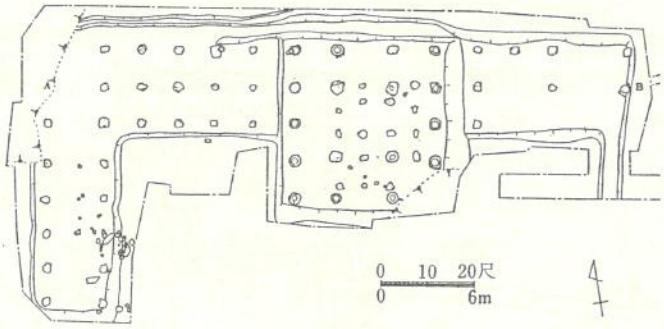
鎌倉・極楽寺は、正元元年（1259）に、北条重時を壇越として忍性により開かれた律宗寺院であり、発掘調査では、寺院の中心建物の一棟、方丈華蔵院のものと推定される切石積基壇と、応永32年（1425）の火災に相当する焼土層を確認している。この基壇の建物は応永の火災の後、再建されているものの、16世紀の後半には廃絶していた可能性も指摘されている。[31]

B－3類（居館・城郭付属氏寺・堂）

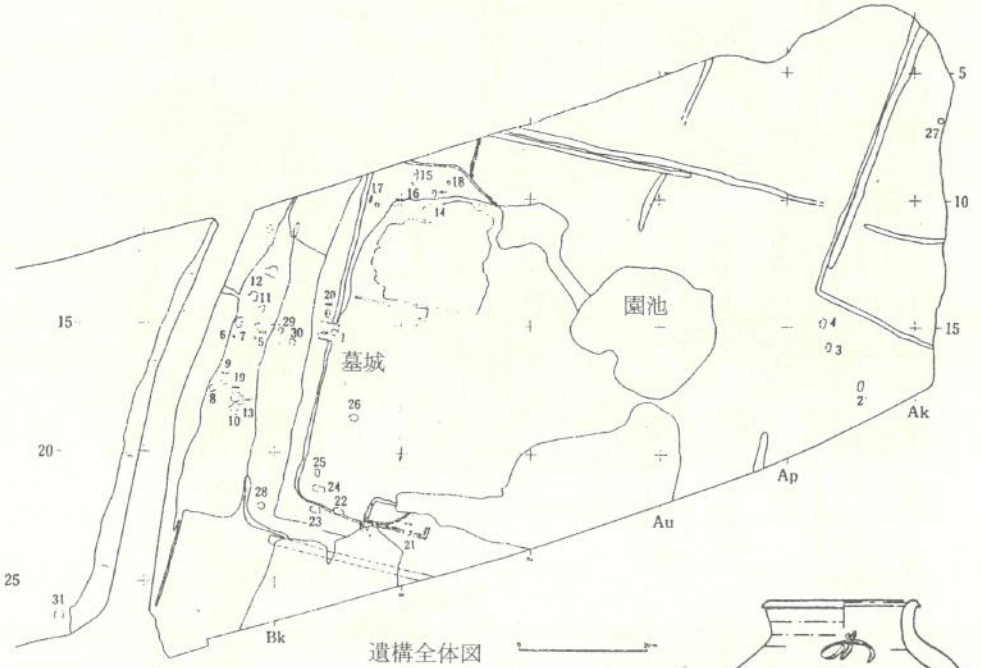
14世紀以降、土豪層の居館や城郭内に建立された氏寺や持仏堂で、城郭内の守護神祠もこの類型に含めることができよう。この類型には新潟県新発田市・宝積寺館跡、千葉県木更津市・笹子城跡などの仏堂が含まれ、また、神社関係では千葉県酒々井町・本佐倉城跡の妙見祠跡などを挙げることができる。

宝積寺館跡は国人・竹俣氏の居館である。居館に隣接して仏堂遺構と火葬土坑、土坑墓が確認されており、墨書板碑や銅碗、仏華瓶などが出土している。仏堂は14世紀代には成立しており、17世紀まで存続している。[32]

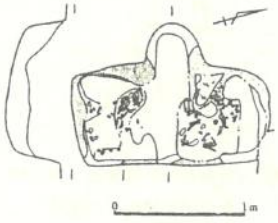
笹子城跡は、15世紀後半から16世紀代にかけて機能した真里谷武田氏系の城郭である。ここでは主郭に隣接した曲輪から銅製独鈷杵と水晶製五輪塔形舎利容器が出土しており、この付近に、これらの仏具類を納めた持仏堂が存在したと考えることができる。[33]



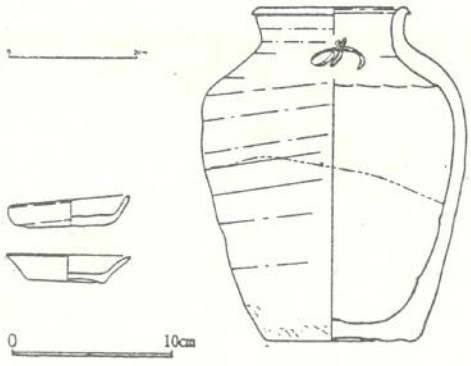
日向廃寺中心仏堂跡



遺構全体図

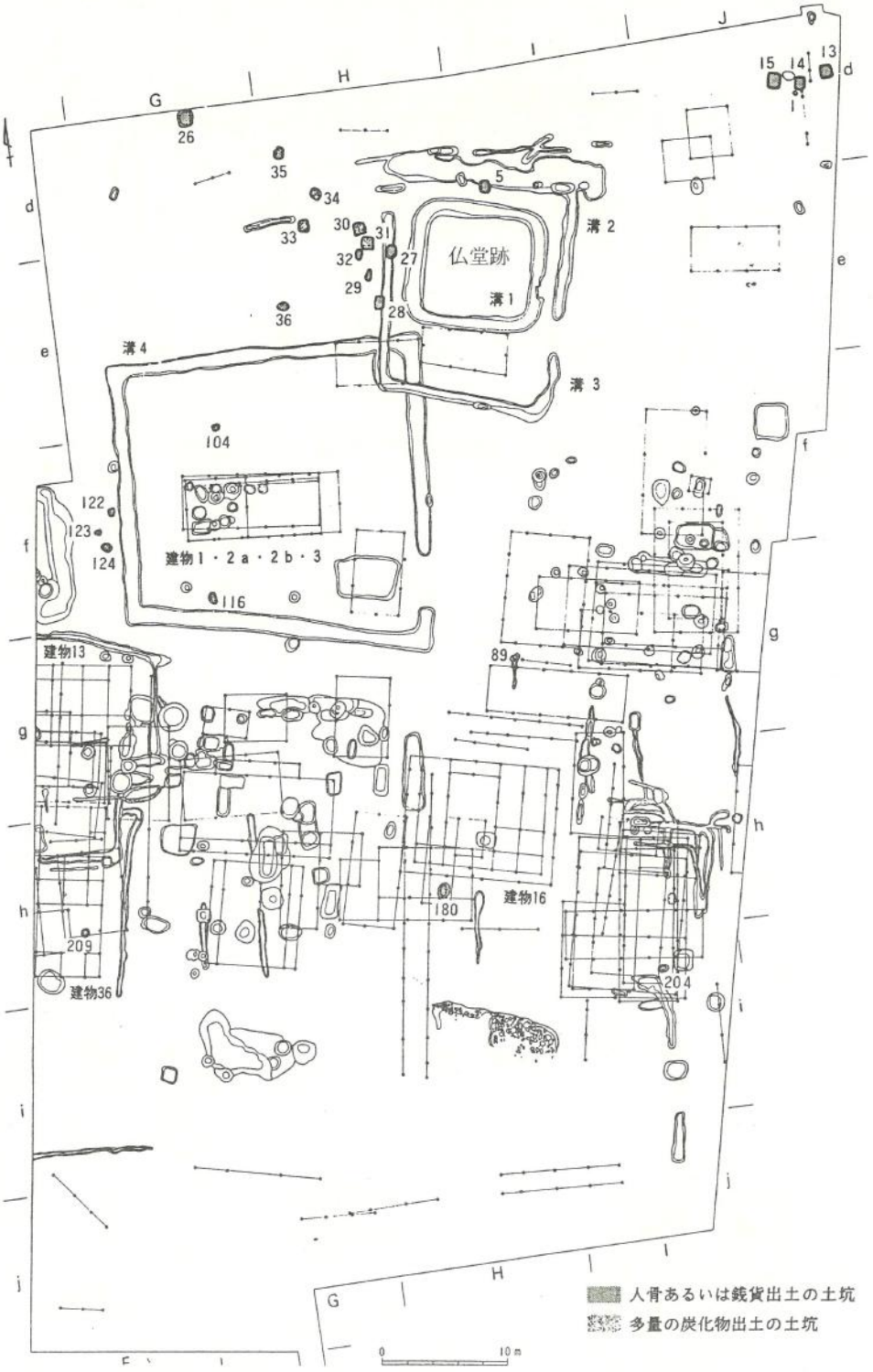


火葬土坑



1号配石墓骨臓器

白石大御堂遺跡


仏堂跡
溝1
溝2
溝3
溝4
建物1・2a・2b・3
建物13
建物16
建物36
人骨あるいは銭貨出土の土坑
多量の炭化物出土の土坑
0
10m

宝積寺館跡遺構全体図

本佐倉城は千葉氏の居城であり、15世紀後半から16世紀にかけて機能している。ここでも主郭に隣接する曲輪で妙見社のものと思われる掘立柱建物と方形区画を確認している。[34]

C類型（村や宿市の寺堂・墓堂）

14世紀以降、村落内や宿・市内に営まれる寺や堂で、墓域が伴う場合が多い。これに関連して、14世紀以降の集団墓内に成立した墓堂（供養堂）もこれに含めることとする。明確に村寺の考古学的な実例を提示することは難しいが、宿内の寺・堂には栃木県国分寺町・下古館遺跡、埼玉県毛呂町・堂山下遺跡などの例を挙げることができる。また、墓域の供養堂には千葉県市原市・草刈六之台遺跡の例を挙げることができる。

下古館遺跡は、牛道と言われる街道沿いに堀を伴って形成された宿遺跡で、13世紀代に成立し15世紀後半には消滅するようである。宿のほぼ中央部分には一辺22m前後の方形区画と塚、土坑が存在する。方形区画内には堂と思われる掘立柱建物が存在し、塚周辺では五輪塔、板碑、火葬骨が確認でき、宿の中央部には堂と墓域を備えた宗教空間が存在していたと考えられる。[35]

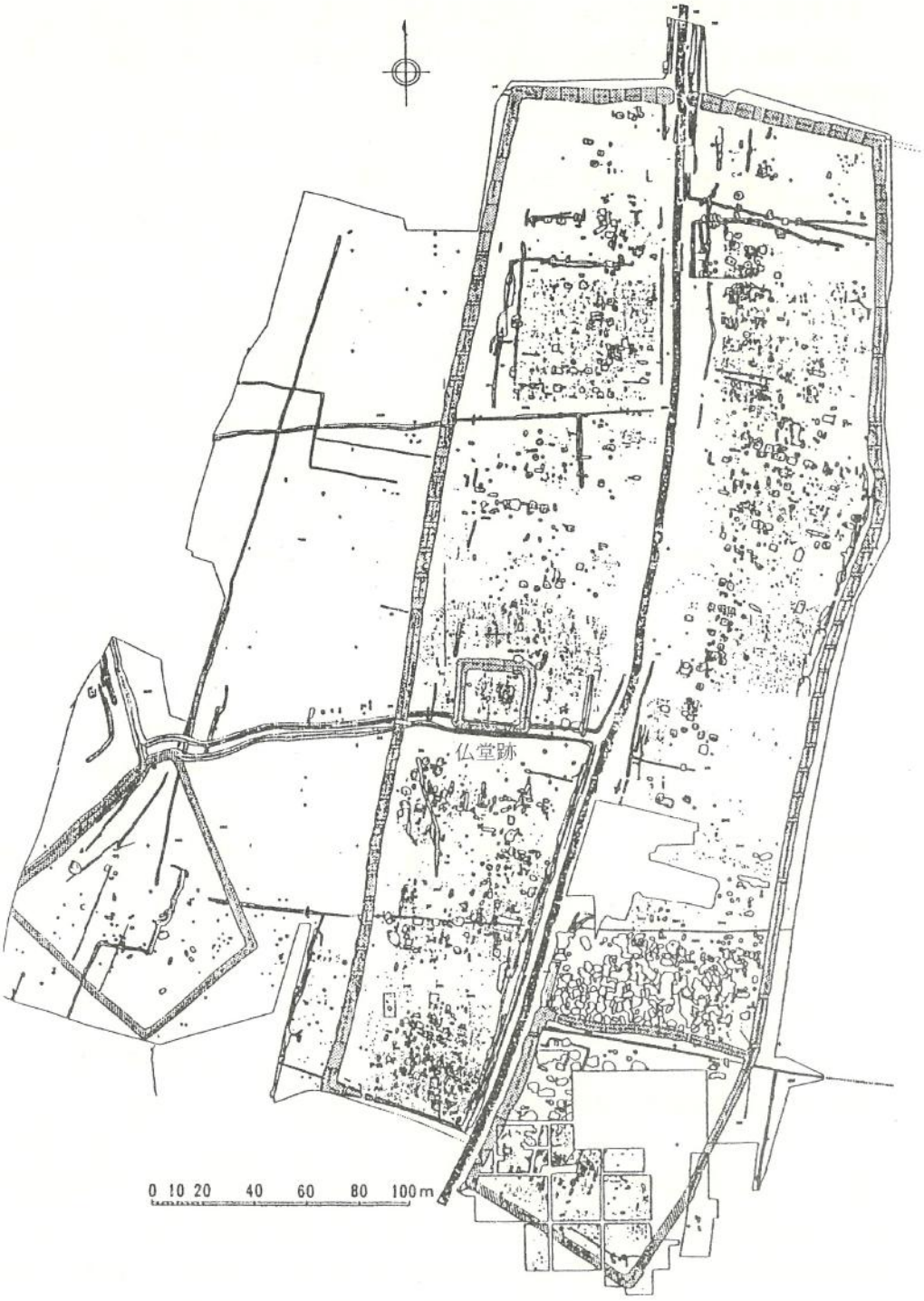
堂山下遺跡は、鎌倉街道に沿って検出された集落遺跡で、苦林宿の可能性が指摘されている。出土遺物から、14世紀代から16世紀初頭までの年代が推定できる。遺跡の南西隣接部分には「崇徳寺」という寺跡が存在しており、現在も「延慶第三暦（1310）」の紀年銘のある板碑が存在する。この崇徳寺跡は、確認調査の結果、その寺域は南北約20m前後の範囲であり14世紀前半代には成立していたことが判明している。堂山下遺跡の発掘調査範囲では、火葬土坑や土坑墓も多数検出されており、崇徳寺と関連する墓域が形成されていた可能性が高いだろう。[36]

草刈六之台遺跡は、12世紀代から17世紀代以降まで継続して使用された墓域であり、14世紀以降、集団墓としての性格を帯び墓域を急速に拡大している。墓域の中核部には延慶2年（1309）の板碑を伴う塚が存在し、その南面に、塚を拝するように礎石建ち、2間四方以上の供養堂が建てられている。堂の年代は特定できないが、板碑の立てられた14世紀代頃の造立と考えられる。[37]

Ⅲ．中心仏堂建物の規模・構造

前節では、主要な発掘調査例を中心に中世寺院の類型化を行ったが、次に、これらの寺院の中心仏堂の規模、構造の比較を行い、そこに見られる傾向を分析したい。これは、中心仏堂の規模・構造は、そこで行われた仏教儀礼の性格・内容を反映すると同時に、その寺院の造営者の経済・社会的な状況を反映していると考えられるからである。

第1表は、前節で扱った寺院関連遺跡の中で、中心仏堂の規模が判明する例を一覧にし



下古館遺跡遺構全体図

第1表　中世寺院の中心仏堂の規模比較表

類型	寺院・遺跡	年代	桁行	梁行	備考
B－1	毛越寺	12世紀後半	29.00m	22.20m	礎石建物
B－1	永福寺	12世紀後半	24.12m	22.40m	礎石建物
B－2	極楽寺	13世紀後半	23.40m		切石基壇
A－3	浄水寺	12世紀後半	12.00m	10.80m	礎石建物
A－2	横町遺跡	12世紀後半	12.00m	9.79m	礎石建物
A－2	慈光寺跡	13世紀前半	10.00m	10.00m	基壇掘立柱建物
B－1	日向廃寺	12世紀後半	9.18m	9.79m	礎石建物
B－3	宝積寺館跡	14世紀代	約8m	約8m	方形区画溝内側
A－3	神宮寺遺跡	13世紀後半	6.90m	6.50m	礎石建物
A－4	金剛寺跡	12世紀代	6.80m		基壇
C	下古館遺跡	14世紀代？	5.00m	5.00m	掘立柱建物

たものである。これを見ると、間口の規模が20m以上（第1グループ）、12m～9m（第2グループ）、7m～5m（第3グループ）の3グループに分類することが可能である。また、一辺8mの正方形のスペースに建てられていたと思われる宝積寺館跡の仏堂規模も、最大で一辺8m、庇の出などを考えれば一辺5～6m規模と考えられ、第3グループに含まれると考えてよいであろう。

最も大規模な第1グループの寺院の造立主体は、言うまでもなく奥州藤原氏、鎌倉幕府将軍家、鎌倉幕府執権が壇越となって建立されているものであり、当時の寺院としては最も規模の大きな特殊な大寺院と考えてよいだろう。

第2のグループにはA－2・3類、B－1類の寺院が含まれ、各類型に共通する仏堂規模であり、中世寺院の仏堂としては一般的な規模であると考えらる。建物構造が判明する日向廃寺、浄水寺、横町廃寺の例では、内外陣の区画は明確で、翼廊もしくは孫庇の付く構造となっており、このグループの仏堂では、第1グループに及ばないまでも比較的規模の大きな顕密教系の仏教儀礼の執行が可能であったと考えられよう。

また、B－1類・日向廃寺は上層在庁官人であり開発領主でもある常陸平氏・多気氏が壇越となっている寺院であり、A－3類・浄水寺、A－2類・横町廃寺の整備・復興にも類似した階層の関与を考えることが可能であろう。ただし、慈光寺跡については、確認で

きた建物が中心仏堂であるかどうか断定できないため、この限りではない。

第3グループにもA－2・3類、B－3類、C類の各寺院が含まれ、下古館遺跡の仏堂範囲と類似する寺域規模を持つC類・嵩徳寺跡についても、このグループに含めて考えることができる。第2グループ同様、中世寺院では多く見られる仏堂規模である。

このグループの下古館遺跡の仏堂は2間×2間の主屋に縁もしくは庇が付く構造、神宮寺遺跡の仏堂は3間×3間、1間幅の内外陣と向拝が付けられる。神宮寺遺跡の仏堂の内外陣は仏像を安置し、主に礼拝を行ったスペースと考えられ、下古館遺跡のものも同様と考えられる。また、このグループには国人領主の居館持仏堂である宝積寺館跡の仏堂遺構も含まれており、そこでは礼拝を中心とした最低限の仏教儀礼の執行が限界であったと推定できよう。そして、その実態は、寺院と言うよりも堂であったと言えよう。

第3グループの造営主体については、第2グループのそれよりは下位の階層が想定できる。例えば金剛寺遺跡の仏堂には、播磨系の瓦が多量に供給されていることから、権門寺院とつながりを持つ僧侶集団などに造営・運用主体を想定することができ、その性格は権門寺院の別院的なものを考えることも可能である。また、神宮寺遺跡には式内社に付属する宗教者集団による造立・運営を想定でき、宝積寺館跡の仏堂の造立層には国人領主、下古館遺跡の仏堂や堂山下遺跡の崇徳寺については宿の構成員を考えることできる。

Ⅳ．中世寺社の変遷と背景

以上、中世寺院の類型化を行い、それらの寺院の中心仏堂の規模・構造について比較・分析してきたが、次にこれらの結果に神社関係の状況を含め、中世寺社の変遷とその背景について段階設定を行いながら概述してみたい。

Ⅰ期・中世寺社濫しょう期（11世紀代）

この段階では、考古学的に明確な中世寺院の類型を認めることができないが、密教修法に代表される新たな仏教儀礼・信仰の中央から地方への浸透が確認できる。

山梨県増穂町・権現堂遺跡では、多数の泥塔を焼成した11世紀代の焼成土坑が確認されている[38]。ここで焼成されていた泥塔は、10世紀代を境に、中央で整備・成立した密教修法「泥塔供養」の法具と考えられ、このような泥塔焼成土坑の存在は、新たな仏教儀礼と信仰が地方に浸透し始めていたことを如実に示していると言えよう。そして、この種の新たな仏教信仰の地方への流入は、次段階にB－1類型の中世寺院を地方で成立させる素地を準備することになり、その背景には、在庁官人層や開発領主層の在地における活発な活動と、荘園公領制成立による中央と地方との盛んな交流が大きく関与していたと考えられよう。

このような信仰変化を受けて、国分寺に代表される地方の古代寺院についても、この段階には寺院中枢部を含めて、古代的な景観・機能はほぼ完全に失われ、寺域周辺は上総国分寺に見られるように墓域化する傾向すら認められ、次段階以降に成立するA－1類型の中世寺院が成立する環境を形成することになるのである。

一方、神社関係では、東国の代表的な神社である鹿島・香取神宮周辺で、この段階前後、つまり10世紀から11世紀にかけて新たな変化が見られるようになる。

香取神宮周辺では、中世香取社領中の葛原牧・織幡村の範囲に、10世紀から11世紀にかけて土器焼成土坑多数を伴う大規模な集落遺跡（妙見堂遺跡）が成立、このような牧に土器生産が伴う形は、古代末期の摂関家領・楠葉牧と類似する形態でもある。葛原牧・織幡村は中世香取社領の中でも中核となる大祢宜家領に属する部分であり、この段階を境に中世香取社領の骨格が成立していったと推定することができる。[39]

また、鹿島神宮周辺では、神宮の西側に隣接する厨台遺跡群で、10・11世紀代に大型の掘立柱建物を含む多数の掘立柱建物群が確認できるようになり、同時期の鹿島郡衙の衰退に伴い、神宮周辺にその機能が移動した可能性を考えることができる。[40]

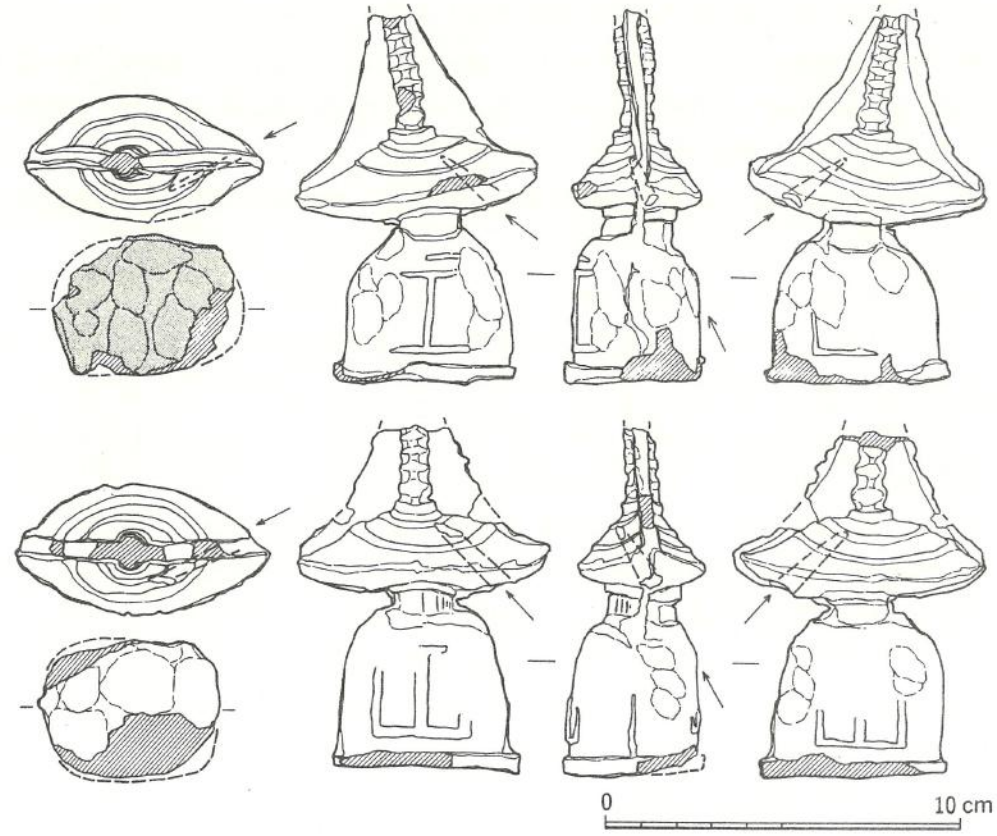
このような、香取・鹿島神宮における動向は、当時成立しつつあった一宮制を準備し、それを反映する現象と考えられ、中世的な神官組織と所領の編成に対応する様相として位地づけることができよう。

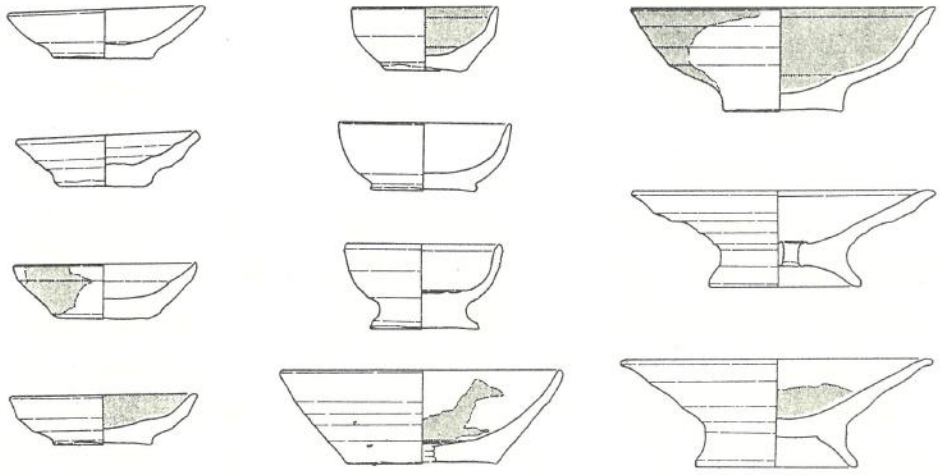
II期・中世寺院確立期（12世紀後半～13世紀前半）

B－1類型・開発領主系氏寺が各地で建立され、A類型の古代寺院の復興・整備も一部で確認でき、本格的な中世寺院が成立する段階である。

B－1類型の寺院は、瓦を含めた仏堂建築、浄土庭園、定朝系の仏像がセットの形で中央から移入されており、[41]使用される瓦には中央官衙系や石清水八幡宮・六波羅蜜寺系のものが存在する。また、この時期は全国的に経塚が多数営まれると同時に、南関東では中世初期の土坑墓・火葬墓が明確に成立する時期にも当たっている。[42]このように、B－1類型寺院の成立、経塚の造営、中世的葬制の確立がほぼ同時に進行しており、この3要素は互いに密接に関連していたと考えられる。そして、京都系の瓦や建築・仏像の移入、東城寺経塚の銘文に見られるような経塚造営への延暦寺僧侶の関与などから、その背景には延暦寺など権門寺院の関与を考えることができ、その動きは、東城寺経塚や日向廃寺などの状況から、①権門寺院の勧進僧による開発領主層などへの経塚造営の勧誘→②寺院造営の働きかけ→③寺院周辺地域への権門寺院僧侶による葬制への関与、という順で進行したと考えてよいだろう。

一方、A類型・古代寺院系の寺院では、A－2・3類型が確認できる。この段階で確認できるA－2類型には慈光寺が、A－3類には浄水寺、横町廃寺があり、さらにA－3類・





（S＝1/4）

権現堂遺跡出土、泥塔・土器類

平泉寺も存在した可能性が考えられる。この内、慈光寺は9世紀代に天台別院であり、平泉寺は12世紀後半には延暦寺の末寺になっていることから、その成立の背景には延暦寺など権門寺院の存在を想定することができ、権門寺院との間に本末関係が結ばれたものと思われる。さらに、A－2類型・千葉寺では境内に経塚が築かれており、前述のB類型寺院と同様にA類型・古代寺院系の中世寺院においても経塚の造営が、その復興の契機となっていたと言うことができよう。

このように、経塚造営は、A・B類型の中世寺院や中世墓域が成立する上で大きな契機となっており、その背後には権門寺院に属する僧侶集団の存在を想定できよう。そして、このような動きは、権門寺社やそれに連なる寺社の所領形成を一つの目的としていたと考えられる。

これに対応するように、A－4類型金剛寺・光明山寺などの、権門寺院の行場的な小規模寺院や別所寺院の成立も確認でき、この段階における権門寺院の活発な活動を認めることができる。

Ⅲ期・中世寺院整備期（13世紀後半～14世紀前半）

この段階には、A類型・古代寺院系寺院の殆どが復興・整備されると同時に、B－2類型・得宗・御家人系氏寺が一斉に建立され、中世前半の寺院の諸類型が出揃う形となる。

前段階で復興したA－2類型・慈光寺でも、この段階以降、僧坊群の整備拡充が行われており、新たに復興・建立された寺院以外でも寺院の整備が進行していることが確認できる。さらに、A－3類型・神宮寺遺跡では石塔墓群が、B－2類型・白石大御堂遺跡では石組墓が確認でき、鎌倉を中心に多く見られる、寺院に隣接するヤグラについても、これと同様の性格を持つと考えてよいであろう。このように、この段階以降、武士・僧侶層の墓を中心に寺院に伴う墓域が一般化して行くと考えられ、この時期における寺院の復興・建立は、墓域の創設・整備と強く関連していたことを指摘できる。

この段階に成立する寺院では、鎌倉寺院の多くが禅・律宗に属し、円福寺は禅宗、三村山清涼院は律宗、千葉寺は律宗僧侶の活動が確認できるなど、禅・律宗の関与が強く認められる。中でも律宗僧侶は、葬送に深く関与したと指摘されているが、この段階における寺院の復興・建立と、それに伴う墓域の整備・創設には彼らの関与があったことは充分に想定でき、彼らの古代寺院の復興や氏寺系寺院の建立は、在地の武士層を中心とした葬制に大きな影響を与えたと考えられよう。このような視点から見ると、下総国分寺で出土した光明真言の墨書土器は、律宗僧侶の国分寺の復興、さらに彼らと葬送における光明真言との関係を考古学的に考える上で、極めて示唆的な遺物であると言うことができよう。

また、律宗僧侶の手により南都系瓦の東国への導入が行われていることも、この段階の特筆すべき事象である。

Ⅳ期・中世寺院変質期（14世紀後半～15世紀前半）

C類型・村や宿市の寺堂と墓堂及びB－3類型・居館付属の氏寺堂が明確に確認できるようになる段階である。

C類型の堂山下遺跡の崇徳寺は14世紀前半には存在が確認でき、下古館遺跡の仏堂も14世紀代には成立している可能性が高く、両遺跡の存続年代から考えて、これらの仏堂の中心的な年代はこの段階に当たると考えられる。また、これに関連して、A・B類型寺院の一部には、この段階を境に、門前などに宿を形成させる例も認められるようになり、A・B類型寺院の一部にはC類型的な性格を帯びるような傾向が認められる。

その一例として、千葉県袖ヶ浦市に所在する延命寺と荒久遺跡の例を挙げることができる。延命寺は、寺伝では13世紀後半に醍醐寺系の僧侶が復興したとされる寺院で、考古学的に確認はされていないが、先の分類ではA－2類型もしくはB－2類型に属する中世寺院と考えられ、南北朝期の両部曼陀羅も蔵されている。この寺院の門前に、14世紀中ごろには宿的な性格を持つ荒久遺跡が成立し、15世紀代を中心に活動している。この遺跡からは不動明王の真言「𑖀𑖭𑖽」の墨書土器も出土しており、密教系の信仰の存在が確認でき、延命寺と密接な関係にあったことが推定できる。[43] A・B類型寺院の門前に成立する宿・市は、広島県草戸千軒遺跡や石川県普正寺遺跡も同様な性格として考えることが可能であり、宿内におけるC類型の仏堂の成立と表裏の関係にあったと言うこともできよう。そして、その宿内のC類型の仏堂には墓域が伴っているが、門前の宿が形成されるA・B類型の寺院も宿の墓域と関係を持つか、宿の構成員により寺院の墓域が拡大されたことも予想される。

また、宿関連以外のA・B類型寺院においても墓域の拡大が考えられる。B－2類型・白石大御堂遺跡では、この15世紀前後には多数の火葬土坑が出現し、墓域の拡大が確認できる。このことから、宿・市とA・B類型寺院との関係と同様に、この段階にはA・B類型寺院も、それまでの壇越氏族のみとの関係から寺院周辺の上層農民との間にも関係を拡大していたとも考えられる。

この時期、特に15世紀代には、東国を中心に月待ちや庚申信仰に代表される結集板碑が多数造立されており、[44] 各地域において上層農民で構成される信仰集団の存在が考えられる。そして、この信仰集団の形成と、C類型仏堂の成立、A・B類型寺院の門前宿の形成、A・B類型寺院の上層農民との関係拡大とは、いずれも深く関連していたと考えてよいであろう。

さらに、14世紀以降、東国、特に東京湾沿岸の品川や神奈川などの港湾都市では、それまでの律宗以外に日蓮宗系の寺院が都市構成員により建立されており、これは宿内のC類仏堂の成立と対応すると考えられ、そこには日蓮宗などの新仏教系の信仰が大きく係わっ

ていたことが判明している。[45]

一方、B－3類型・宝積寺館跡の持仏堂も14世紀代には成立し、墓域を伴っていることが判明しているが、これと類似した状況は、千葉県袖ヶ浦市に所在する、禁裏御料や覚園寺領であった畔蒜郡横田郷内においても確認することができる。

横田郷には応永18年（1411）の検注帳案が存在しており、そこには郷内に存在する寺社の記述も見ることができる。その多くは現在でも場所を特定することができるが、[46]中でも観音堂と阿弥陀堂は、土豪・名主層クラスと思われる郷内有力氏族の墓地内に位置する仏堂で、氏族墓に伴う供養堂的な性格を考えることが可能である。これは、15世紀以降、氏族墓が拡大する中で、村堂である観音堂・阿弥陀堂が有力な氏族墓の供養堂に取り込まれていった結果と推定でき、村堂が有力氏族の持仏堂的性格もあわせ持つようになったと考えられる。

14世紀中頃以降、南関東では土豪層クラスのものと思われる墓域が独立して営まれるようになっているが、これは、この時期における土豪層の実力の蓄積と活発な活動に対応するものと考えられ、B－3類仏堂もこれに平行して成立したと考えられよう。[47]

Ⅴ期・中世寺社解体期（15世紀後半～16世紀）

中世寺社が解体し、近世的な形態に再編成される段階である。

まず、A類型・古代寺院系中世寺院とB－1・2類型の氏寺系寺院において、寺院自体の廃絶や急速な衰退化傾向が多く認められる。A－2類型・慈光寺では僧坊の主だった造営は、確認調査の範囲では15世紀代で終了しており、A－2類型・円福寺、A－3類型・浄水寺跡、神宮寺遺跡、B－1類型・永福寺、法界寺、B－2類型・白石大御堂遺跡などは、15世紀後半までに急速に衰退し、一部が墓域として残存する他は廃絶に向かっている。これは、寺領荘園に経済的な基盤を持っていた寺院が、荘園を喪失することによって必然的に起きる結果であり、15世紀後半、鎌倉府の後ろ盾を失い、荘園経営が困難となり逼塞する鎌倉諸寺院の状況と一致すると言えよう。しかし、前段階以来、周辺農民層の信仰集団との関係を深め、存立基盤をそこに移行させることに成功したA・B類型寺院については、この時期に近世的な村落寺院として転生することが可能であったとも推定できる。

その一方で、A・B類型の中では、A－3類型・平泉寺のように、この段階でも広大な僧坊群を維持する例が存在する。これは、権門寺社との本末関係や寺領荘園のみに遺存するのでなく、平泉寺の例では白山信仰に見られるような数国単位の広域信仰圏を形成したことに直接の原因を求めることができる。ここに、東国の出羽三山信仰に代表されるような近世的な広域信仰圏の成立を見ることができ、これは、この時期に盛期を迎える六十六部経塚の信仰に見られる広域信仰圏と対応させて考えることができよう。

また、この段階には、城郭内にB－3類型の持仏堂や守護神祠が多く営まれるが、これ

と平行して城下寺院の成立も確認できるようになる。このタイプの寺院は、B－3類型の城館内の寺院・仏堂とC類型・宿内の仏堂とが混合した形態とも考えられ、代表的な発掘例としては福井県一乗谷のサイゴー寺跡の例などを挙げることができる。[48] 14・15世紀代に機能した宿・市の多くは、15世紀末期から16世紀初頭までに消滅し、戦国大名の手により城下の宿として再編成されたと考えられ、そこの宗教空間であった仏堂を取り込む形で城下寺院は形成されたと考えることができる。この種の寺院は、城下の宿が近世まで存続した場合、多くは近世までその命脈を保っており、ここにも近世的な寺院の形態を見ることが可能である。

V．まとめ

以上、中世寺社について寺院を中心に類型化と分析を行ってきたが、最後に分析の結果、気がついたことについて述べてまとめとしたい。

第一点として、中世寺院の中で、古代寺院系中世寺院の占める比重が高いことが指摘できる。古代寺院の中世における復興については、文献資料の面では13世紀後半における律宗僧侶の活動が指摘されているが、考古学的には古代寺院の復興は既に12世紀後半には確認でき、その活動の主体には顕密教系の権門寺院の存在が想定できた。つまり、古代寺院は12世紀後半と13世紀後半の二段階にわたり復興・整備が行われていったと考えることができる。これは、『粉河寺縁起絵巻』のラストシーンに見られるように、山中の荒れた粗末な古寺を霊験により僧侶と在地領主が復興するという状況を思い浮かばせる。そして、権門寺院はその寺院と本末関係を結ぶことにより寺院所領を獲得し、律宗僧侶は復興した古代寺院を拠点に教線を拡大したと考えられよう。そのような意味で、古代寺院の中世における聖地性は極めて強かったと思われ、今後、中世寺院の研究にも古代と中世を通した広い分析視点が必要であろう。

第二点として、中世寺院と中世墓地の変遷の画期が非常に類似することである。今回提示した中世寺院の変遷と中世墓域のそれとは、12世紀後半、13世紀後半、14世紀後半～15世紀代の各画期で一致し、互いに密接に関連していることが指摘できる。そして、その変遷は、寺院に直接関与する階層及び造墓階層の拡大という傾向でとらえることが可能である。また、それは、中世寺院が宗派を問わず葬送と強い関連性を持っていたとも言うことができ、今後、中世寺院の分析も墓域と葬制を視野に入れた総合的な分析が必要となるであろう。

冒頭でも触れたように、中世寺社の研究は、黒田俊夫氏の顕密体制論が発表されて以来、文献史学を中心に多岐にわたる研究が行われ大きな成果を挙げている。今回、本稿で行っ

た中世寺院の類型化と寺社の変遷状況の分析は、その文献史学の成果と筆者が把握している範囲の考古資料がどの程度整合するか否かをを試みる作業であったとも言うことができる。そのため、考古資料の類型化と分析には文献史学の成果に引きずられた部分も認められ、考古資料の把握が不充分な点も否定できない。また、神社関連の遺跡・遺構についても充分に触れることができなかったが、これも現時点での資料が不充分なためである。今後、中世寺社関連の考古学的な資料の蓄積を待って、前述の視点も考慮した研究を行いたい。

（千葉県教育庁生涯学習部文化課）

註・参考文献

1）黒田俊男『日本中世の国家と宗教』　岩波書店　1975

2）平　雅之「中世宗教の社会的展開」『講座日本歴史３　中世１』　東京大学出版会　1984
佐藤弘夫『日本中世の国家と仏教』　平凡社　1987

3）細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』　吉川弘文館　1987

4）海津一郎『中世の変革と徳政』　吉川弘文館　1994

5）山田邦明『鎌倉府と関東』校倉書房　1995

6）上原真人「仏教」『岩波講座　日本考古学４』　岩波書店　1986

7）山岸常人『中世寺院社会と仏教』　塙書房　1989

8）「仏教芸術　164号」特集・鎌倉の発掘　毎日新聞社　1986

9）笹生　衛「有吉北貝塚における中世土壙墓とその出土遺物」『研究連絡誌』第15・16号　財団法人千葉県文化財センター　1986

10）『日本考古学年報　44』　日本考古学協会　1993

11）『下総国分寺』市立市川考古博物館図録17　1995
墨書土器については、市川市立考古博物館山路直充氏のご好意で実見することができた。

12）註３）に同じ。

13）『慈光寺跡確認調査報告書』　都幾村教育委員会　1994

14）入間田宣夫「松島寺の瓦が発見された」入間田宣夫・大石直正編『よみがえる中世７みちのくの都多賀城・松島』　平凡社　1992、及び註10に同じ。

15）『房総考古学ライブラリー７　歴史時代（１）』　財団法人千葉県文化財センター　1993

16）『上総法興寺跡－第一次発掘調査概報』　千葉県教育委員会　1977
山田友治「房総における中世のやきものについて(2)」『歴史館第６号』　1976

17）『経塚　－関東とその周辺－』　東京国立博物館　1988

18）『千葉縣史料　中世篇　縣外文書』　千葉県　1966　378、379号文書、589～596号文

書

19）稲野祐介・大渡賢一「岩手北上市横町遺跡」『日本考古学年報　46』　日本考古学協会　1995

20）『中世北陸の寺院と墓地』　北陸中世土器研究会　1994

21）『浄水寺跡発掘調査報告書第一分冊浄水寺墨書資料集』　石川県立埋蔵文化財センター　1989

22）『茨城県史　原始古代編』　茨城県　1985

23）早淵隆人「徳島県板野郡上板町神宮寺遺跡」　註10に同じ。

24）京都府相楽郡山城町教育委員会「光明山寺跡(京都府)」『大知波峠廃寺跡シンポジウム資料』　1995　及び『日本考古学年報　45』日本考古学協会　1994

25）駒井正明・近藤康司・田中龍男「金剛寺跡出土瓦の検討」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要２』　1994

26）註22に同じ。

27）『法界寺跡発掘調査基本計画書』　足利市教育委員会　1992

28）馬淵和雄「鎌倉永福寺と苑池」註８に同じ。
田代郁夫「神奈川県・伊豆駿東における中世墓の様相」　埼玉県立博物館シンポジウム資料　1995

29）『白石大御堂遺跡　園池を伴う中世寺院址の研究』　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991

30）糸賀茂男「忍性が開いた寺ー三村寺」『中世の風景を読むー２　都市鎌倉と坂東の海に暮らす』　新人物往来社　1994

31）松尾宣方・斎木秀雄「鎌倉の社寺遺跡の態様と事例」註８に同じ。

32）註20に同じ。

33）柴田龍司「笹子城の概要」『研究連絡誌第37号　特集・小櫃川流域の中世遺跡』　財団法人千葉県文化財センター　1993

34）『本佐倉城跡確認調査報告書』　財団法人印旛郡市文化財センター　1995

35）田代　隆「「うしみち」と下古館遺跡」能登健・峰岸純夫編『よみがえる中世５　浅間火山灰と中世の東国』　平凡社　1989

36）『堂山下遺跡』　財団法人埼玉県埋蔵文化財事業団　1991

37）『千原台ニュータウンⅥ―草刈六之台遺跡―』財団法人千葉県文化財センター　1994

38）『権現堂遺跡』　増穂町教育委員会　1989

39）『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』　小見川町埋蔵文化財調査会　1989

40）『厨台遺跡群発掘調査報告書』　鹿島町教育委員会　1993

41）12世紀代における、定朝系仏像様式の地方への伝播については、房総の事例として吉田辰朗氏が言及している。
吉田辰朗「房総半島南端の平安彫刻の様相－平安時代後期の地方仏の様式変革について－」『国立歴史民俗博物館研究報告　第19集』　1989

42）笹生　衛「東国における中世墓地の諸相－房総の事例を中心に－」『千葉県文化財センター研究紀要１６』　財団法人千葉県文化財センター　1995

43）加藤正信・笹生　衛「荒久遺跡の概要」註33に同じ。

44）千々和到『板碑とその時代』　平凡社　1988

45）湯浅治久「東国の日蓮宗」註30に同じ。

46）笹生　衛・柴田龍司・鈴木哲雄・湯浅治久「上総国畔蒜庄横田郷の荘園調査報告」『千葉県史研究』第３号　1995

47）註42）と同じ。

48）水藤真「一乗谷の信仰世界」『よみがえる中世６・実像の戦国城下町越前一乗谷』　平凡社　1990